



6 所感、提言事項、課題等

これらの取組は、多治見市の博物館やミュージアムにおいても活かすことができる。特に、地域の歴史資料を教育現場と結びつける仕組みづくり、当事者の生の言葉や地域史のデジタルアーカイブ化、若い世代に届く展示手法の導入は、市内施設の価値向上に直結する。また、資料保存環境の改善や、寄贈資料を受け入れやすい体制整備は、地域の歴史資源を将来に引き継ぐうえで重要である。今回の視察を通じ、歴史を未来へつなぐための長期的視点を持った文化政策の必要性を強く感じた。

【林美行】

知覧平和会館の体系的な展示に触れ、特攻隊員の日常や家族への思いが「特別なことではなく日常の中にあった」と伝える姿勢に深く感銘を受けました。戦後 80 年が経過し戦争の悲惨さが風化する中で、多治見市で長年続けてきた「戦争と平和展」を通じて、体験を語り継ぐ平和教育の重要性を改めて痛感しています。

この悲劇は知覧のみならず多治見市にも深い傷跡を残しており、人口 3 万人に対し 1,276 人もの戦死者を出したほか、学徒動員や空襲など市民に多大な負担を強いました。市内に現存する戦犯逃亡の舞台となった製陶工場が消失の危機にあるなど、地域の記憶も失われつつあります。

戦時体制は当時の市民生活の中で自然に形成されていきました。幸せな暮らしを守るためには、わずか 8 年で平和が悲惨な時代へと変貌した事実を風化させてはなりません。多治見駅北の空襲記念像などの継承事業を広め、一人一人が日常の尊さを実感できる時代を繋いでいくことが大切であると、帰路につき強く実感しました。

【亀井芳樹】

本視察を通じ、私が一番心に残ったのは、特攻隊員の多くが 20 歳前後という、まさにこれから人生を歩み始める年齢であったという事実です。

遺書や家族への手紙には、日常への思いや家族を案ずる気持ちが率直に綴られており、その一通一通から、戦争が個人の人生をどれほど突然、理不尽に断ち切ったのかを強く実感しました。

展示を見進める中で感じたのは、平和教育において大切なのは、戦争を過去の出来事として知識的に学ぶことだけではなく、戦争が「普通の暮らし」を生きていた一人ひとりに何をもたらしたのかを、自分事として考える視点であるということです。

知覧特攻平和会館の展示は、「なぜ戦争が起きたのか」「なぜ止めることができなかつたのか」といった問いを、答えを押しつけることなく、来館者自身に静かに投げかけていたと感じました。

こうした在り方は、平和教育において非常に示唆に富むものであり、子どもたちが「平和とは何か」「命とは何か」を自ら考えるきっかけを与えるものではないかと感じました。

本市においても、戦争の記憶を単なる歴史として伝えるのではなく、地域の暮らしや人の人生と結びつけて学ぶ機会を大切にしていける必要があると考えます。

体験や資料を通じて学ぶ取り組み、語り継がれる記憶を次世代につなぐ工夫、そして子どもたちが感じたことを言葉にし、対話できる場を整えていくことが重要だと思います。

**【獅子野真人】**

知覧特攻平和会館を視察し、若い隊員たちが残した言葉や写真から、戦争が個人の人生をどれほど深く奪ったのかを強く感じた。歴史を「出来事」としてではなく、「一人の人間の物語」として受け止めることの重要性を痛感し、平和教育の在り方を改めて考える契機となった。

今後の平和教育に求められるのは、単に戦争の悲惨さを伝えるだけではなく、子どもたちが自ら問いを立て、資料を読み解き、他者の立場に想像力を働かせながら考えを深める学びだと考える。語り部の証言や地域資料、一次史料を活用し、歴史を「自分と地続きのもの」として捉えられる環境づくりが必要である。また、平和や人権をテーマにした探究的な学習を通じて、「自分ならどう行動するか」を考える力を育むことも欠かせない。

知覧で得た学びは、平和教育が単なる知識伝達ではなく、他者への共感や命の尊さを自らの価値観として育てる営みであることを示している。こうした視点を踏まえ、多治見市でも子どもたちが平和を自分ごととして捉えられる教育の充実が求められると考えます。

6 所感、提言事項、課題等

写真等  
 ※視察の場合は必須、研修の場合は任意



※視察先、研修先ごとに1枚作成すること。

※「6 所感、提言事項、課題等」は、参加者全員分を記載すること。